

赤黄男と三鬼

白石 司子

新興俳人、富澤赤黄男と西東三鬼の接点
といえは何だろう。

「現代俳句」に関する多くの評論を残した山本健吉は、新興俳句運動の作家たちを「脱俳諧を企図したという一点でつながる」とし、その極北に赤黄男を、そして、「入俳諧」を意図した「唯一の男」として三鬼を位置づけている。

「超現実主義的前衛詩の世界を俳句の上で実現しよう」とし、脱俳諧を志したとされる赤黄男と、「俳への好奇心から、新興俳句の世界へはいった」とされる三鬼、およびそ対照的ともいえる両者の作品を「俳諧」をキーワードに読みすすめていきたい。

一、富澤赤黄男

昭和十二年以来、ずっと華中の戦線にあつた赤黄男がマラリアの為、召集解除となつた約一カ月後、即ち昭和十五年六月に発行された『現代俳句・第三巻』（河出書房）には、日野草城・西東三鬼・藤田初巳・東京三・富澤赤黄男・篠原鳳作の六名の作品が収録されている。そのうちの赤黄男の作品『魚の骨』は、

僕は雲にのらうとした。それは、厳しい水流を、はるか高いところから、こつそり眺めたいと思つたからである。ひとはそれを浪漫だと云つた。

の「まへがき」が示す通り、

ペリカンは秋晴れよりもうつくしい
孔雀の羽根が噴水になつた夕焼
夕焼のやうな魚をさげてる

など浪漫的色彩の濃いものが多く、「旅び」とこれはまたわが姿なり」と題された二二句も、

夕焼の金をまつげにつけてゆく
襟もとに白い三日月をさしてゆく
と、あくまでも誇らかで輝かしい。しかし、赤黄男は「雲にのつた」ままではなかつた。

僕は雲から下ることにした。下りたところには密林があつた。

僕はその密林をくぐつて歩いてゆかう。こゝには、落葉が降りつもつてゐる。僕はこの底しれぬ落葉の深さから、さがし出したものを焚して、自分の思ひをあたためようと考へた。

そう、浪漫に虚しさを覚え、雲から下りた赤黄男は、その底しれぬ落葉の深さの中から「象徴の径」を発見しようとし、「真実のまへ」で「素つ裸で跳躍」を始めるのだ。

絶壁へ冬の落日吹きよせられ

落日の巨眼の中に凍てし鴉

風虐の鴉と雲とふきちぎられたり

『魚の骨』所収、「絶叫」と題された三句。どうしようもない絶壁、沈もうとしていた冬の太陽は強風でそこに吹きよせられ、大空を飛翔していた鴉は、その巨眼のなかに凍り付いてしまった。そして、風に虐げられていた鴉と雲とは、遂にふきちぎられてしまったのである。

新興俳句の特徴でもある、この連作三句

は、「太陽へ通じる象徴の径」を発見しようとした、赤黄男の「絶叫」そのものである。

三月月よ けむりを吐かぬ煙突けむりだて

昭和十六年八月発行『天の狼』所収。日中戦争従軍以前の作品「鶴の抒情」より、「窓」と題されたもの。雲から下り、「三日

月よ」と呼びかける赤黄男、一字空白のあとは、交感した月からの答えだつたらうか。連作が多い中で、たった一句、いや、ひとつしかない、内外へ通じる赤黄男の「窓」は、所詮、けむりを吐かぬ煙突けむりだて、用をなさぬものであると。空白をかかえて立つ煙突が、赤黄男の未来を暗示しているかのようなだ。

憂々とゆき憂々と征くばかり

『天の狼』所収。従軍中の作品「蒼い弾痕」より、「蒼い弾痕」と題された十二句中の一句。昭和十二年九月香川県善通寺へ入隊した赤黄男は、十一月華中へ出征。初出が「旗艦」昭和十二年十一月号であることからして、出征以前のものであると考えられるが、ともかくも、運命は運命として

受け止め、憂々と軍靴を響かせてゆき、たゞ憂々と征くほかなかつたのである。

めつむれば虚空を黒き馬をどる

掌が白い武漢の地図となる

吾はなほ生きてあり山河目にうるむ

『天の狼』所収。「蒼い弾痕」より、「武漢つひに陥つ」と題された七句中の三句。

激戦の末、陥落した武漢。しかし、ふと、めつむれば、虚空には黒き馬が踊り、掌を見れば、白い武漢の地図となつてゐる。それでも、猶、生きて此処にいる吾、それはあの惨劇をよそに変わらぬ山河のようなもので、どうしようもなく赤黄男の目にうるむのである。

句中の「黒」に大義という名のもとに日常茶飯事としてある殺戮の闇を、また、「白」に前線にあつて辛うじて人間として生きる、つまり、戦争に麻痺しがちな神経の覚醒をみる。

困憊の日輪をころがしてゐる傾斜

一木の凄絶の木に月あがるや

『天の狼』所収。「蒼い弾痕」より、「ある地形」と題された六句中の二句。どちら

も当時の世相への配慮から、「戦場」を「傾斜」に、「絶望」を「凄絶」に改訂したものであるが、ストレートな表現を控えることで、内容は一層深みを増す。

嘗て、「はるかに太陽へ通じる象徴の径」を発見しようとした赤黄男であったけれども、異様に意識を昂揚させ続けなければならぬ日々、すっかり疲労困憊し、いまはまだ、目の前にひろがる「地形」の傾斜に日輪をころがしているだけ。

そして、東の間の夜の静寂、一木の凄絶としか言いようのない木にあがるであろうか、月は、あくまでも美しく、戦闘の虚しさを照らし出す。

蛇よぎる戦いくさにあれしわがまなこ

『天の狼』所収。「蒼い弾痕」より、「東洋の雲」と題された九句中の一句。長期にわたる戦争で、すっかり荒れ果ててしまった、わがまなこの前を、ふと、よぎった蛇。それは錯覚、いや、「雲から下り、底しれぬ落葉の深さ」に身を沈めようとしていた赤黄男の化身だったかもしれない。いったい自分はいま、何をしているのだろう。

鶴渡る大地の阿呆 日の阿呆

海鳥は絶海を画かねばならぬ

『天の狼』所収。帰還後の作品「阿呆の大地」より「阿呆の大地」と題された十一句中の二句。何事もなかったかのように渡ってくる鶴。マラリアに罹り、昭和十五年の初めに国内の陸軍病院へ転送（中尉に昇進）された赤黄男は、病室でひとり静かにそれを眺めていたのである。

頭の中を去来したものは何だったろう。

未だ戦場にある仲間、或は、二月十四日に逮捕され、「新興俳句」を志向したが故に、もうひとつの闘争を強いられている「京大俳句」の主要同人への思い……。が、極度の緊張感から解き放たれたとはいえ、一字空白で距離を明確化した地と天へ、ただ「大地の阿呆 日の阿呆」と怒りをぶつけるしか方法がなかったのである。

しかし、どこにあっても、海鳥は絶海の孤島を飛ぶ、いや、画かねばならぬ。この句は、「新興俳句」と運命を共にしようとする赤黄男の決意そのものではなかったか。

椿散るあなまぬるき昼の火事

日溢れ腹のおもたい魚およぐ

『天の狼』所収。「阿呆の大地」より、「春日記」と題された十一句中の二句。戦病の身を養いつつあった赤黄男が内地で目にしたものは何だったろう。それは、なまぬるき昼の火事、また、腹のおもたい魚が泳ぐようなもの。「ああ」に動員解除後はどうしようもない頹廢感が漂う。

蝶墜ちて大音響の結水期

『天の狼』所収。帰還後の作品「天の狼」より「結水期」と題された五句中の一句。

掲句の前に「冬蝶のひそかにきいた雪崩の響」があるが、それはまさに序章。「雪崩の響」が、「大音響」となり、一挙に「結水期」へと突入。そこへ垂直に墜ちた蝶は、音をたてて砕け散ってゆく。原句「蝶絶えて」を「蝶墜ちて」とした為、「大音響」は「蝶墜ちて」と、「結水期」の両方に掛かり、効果的な詩的音響を奏でる。

それでは、「雪崩」から「結水期」へと、赤黄男を飛躍させたのは何であったか。この句が『旗艦』に掲載（昭和十六年一月号）された時代背景、つまり、昭和十

五年から十六年にかけて行われた一連の俳句弾圧、それも昭和十年『旗艦』創刊時に共に参加し、昭和十一年、篠原鳳作没時の句日記に、「つとに氏と白泉と三鬼を心の相手として来た僕には、たまらなく寂寥を感ずる。」と書き留めた赤黄男にとって、後の活躍の場は異なるとはいえ、昭和十五年八月三十一日の西東三鬼検拳の報は、衝撃的であった筈である。そして、長期化の様相を呈する日中戦争——大音響をあげて墜ちた「蝶」また「結水期」は赤黄男の精神の象徴にはかならない。

爛々と虎の眼に降る落葉

冬日呆 虎陽炎の虎となる

寒雷や一匹の魚天を搏ち

『天の狼』所収。「天の狼」より「虎」と題された七句中の三句。「雲から下り、密林をくぐつた」赤黄男、いや、虎の眼の中に降り積ってゆく落葉。異様に、爛々とぎらめく、底しれぬ落葉の中に、はつきりと、「象徴の径」を発見することが出来たであろうか。それとも、阿呆のごとく照る冬日の中で、一字空白が示す通り、ただ呆然と立ち尽くし、陽炎の虎となるしかなかった

ただろうか。

寒空に光る雷、いや、「新興俳句」に目覚め、いまや「天の狼」と化した、一匹の魚は天を搏ち、赤黄男の「青年の歌」はひとまず終わりを告げる。そして、象徴性を深めながら、「たくましい壮年の歌」、「蛇の笛」へと、「うたい継がれてゆく」の

大地いましづかに揺れよ 油蟬

石の上に 秋の鬼あて火を焚けり

種子まけば 日は からからとまはる

なり

『蛇の笛』所収。大戦中の作品「風景画」より、「石版画」と題された四十四句中の三句。『天の狼』では、まだ実験段階としか思えなかった一字空白表記も、壮年の歌『蛇の笛』では、句中に一つから四つ施され、空白のないものといえは、

颱風の夜の爪色の薔薇の棘

（風景画）

とろとろと青海原に醒めるたり

（ ）

いつぼんの枯木がそれに応へけり

剥れたる赤肌の木に倚るべしや

（ ）

いつぼんの枯木へひらく巨きな掌

（ ）

と、「切れ」のないもののみとなつてい

さて、いずれも大戦中に作られた掲句であるが、まるで戦後を予測したかのような「風景」が眼前にひろがってくる。荒涼とした中に紛れも無く存在しているのは、「大地」「石」「日」。しかし、諸々の生長に不可欠な日輪は、ただ、からからと回るだけ。それは種子を蒔く、いや、建設と破壊を繰り返す人間に対し、からからと空回りしているようであり、また、からからと嘲笑っているかのようなものである。

超現実も現実以外のものではない。

（「富澤赤黄男全句集」〈雄鶏日記〉）

現実——それは外部ではなく自己の内
部である。

（「富澤赤黄男全句集」〈クロノスの

舌)

そう、赤黄男にとって、いま、静かに揺れだそうとしているもの、鳴きわめく油蟬、石の上で火を焚く秋の鬼、そして、からからと回る日輪、それら全ては、山本健吉の言う、「超現実」ではなく、「現実」即ち「自己の内部」だったのである。

南へ 南へ 満月となる

流木よ せめて南をむいて流れよ

『蛇の笛』所収。「風景画」より「銅版画」と題された二十七句中の二句、昭和十六年九月、再度の動員令が下り、翌年七月、千島最北端占守島の守備に赴き、「荒涼たる風濤に揉みに揉まれながら、遂に汀に打ちあげられもせず、そうかといって遙か彼方に運び去られることもない不思議な流木群の運命」を、いつも眺めていた赤黄男。そんな流木群の運命に、抗いようのない己が身を重ね、「南へ南へ、せめて南を向いて流れよ、そうすれば満月となるのに」と、流木に呼びかけてみるが、それは、そのまま「銅版画」として埋め込まれたがごとく、答えることすらもない。徒に

時間が流れてゆくだけなのである。

あはれこの瓦礫の都 冬の虹
大露に 腹割つ切りしをとこかな

『蛇の笛』所収。終戦後の作品「蛇の笛」より「天の傷」と題された十四句中の二句。この二句から、傍観者としての赤黄男の顔しか見えないのは何故だろう。「あはれ」また、「腹割つ切りしをとこ」のストリートさ故だろうか。多くのものを「傷」つけてしまった大戦、しかし、それも人間が犯したことに對する「天」から与えられた罰、そんな思いが第三者的立場をとらせているのかもしれない。焼野原となった首都、東京にかかる冬の虹はいつも通り美しく、しかし、時代によって変わる「誠」は、敗戦と同時に、將軍たちに割腹自殺を迫るのである。そんな人間の愚行の全てを、大露が映し出しているようだ。

頭蓋のくらやみ 手に 寒燈をぶらさ
げて

『蛇の笛』所収。「蛇の笛」より「氷の木」と題された九句中の一句。「蛇の笛」は詩語がある」と言ったのは神田秀夫だ

が、

象徴の大伽藍を建てるために、ブロンズの言葉を集積せねばならぬ。

この句においては、「ブロンズの言葉」即ち、「詩語」である。「頭蓋のくらやみ」が、現実の世界から読者を転位させ、超現実へと誘う。

どうしようもない絶望感に覆われた頭蓋の暗闇。手には寒燈をぶら下げて照らし出してみるが、そこだけは暗く閉ざされたままで明るくなることはない。その暗黒は、身をもって戦争を体験し、「氷の木」となってしまう、赤黄男の内部の現実である。

切株に 人語は遠くなりけり

切株はいんじんいんと ひびくなり

『蛇の笛』所収。一句目は、大戦中の「風景画」より、「木版画」と題されたもの。二句目は、終戦後の「黒い卵」より「虚無の木」と題されたもの。嘗て「黄昏の枯木が歩くべき径」と、「木」によって自身の道をも暗示していた赤黄男である

が、いまとなつては、根っここの付いたかたまりと化し、人語すらも遠のいてしまつた。そして、そこにただひとり、いや、ひとつ取り残され、年輪を露にした切株は、ただ、じいんじいんと「虚」しく、ひびいているのである。

空白は 空白のまま 蝌蚪のひしめき
『蛇の笛』所収。終戦後の作品「黒い卵」より「流転」と題された十四句中の一句。

象徴の空白性、
その空白の激しさ、裂帛！

(雄鶏日記)
抽象的なものと具体的なものの組み合わせである「象徴」。その空白が大きい、つまり、二つの距離が離れていればいるほど、激しく、強烈な暗示力を持つ。

「浪漫」に虚しさを覚え、「象徴の径」を発見せんが為に、「連作」と一字空白表記による「切れ」で、「空白の激しさ」を覗き込もうとした赤黄男であったが、おぞましいほどの生命体である。「蝌蚪のひしめき」を見ても、払拭できぬ自らの空白性。「空白は 空白のまま」——それは、全て

を暗示しているかのようにであるが、赤黄男は、最後の句集『黙示』へと、「裂帛」の気合で、「裸足のまま」出發するのである。

二、西東三鬼

『現代俳句・第三巻』発行の約三カ月前に出した西東三鬼句集『旗』（昭和十五年三月発行）は、

或る人達は「新興俳句」の存在を悦ばないのだが、私はその初期以来、いつも忠実な下僕である。(中略)
私の俳句を憎んだ人々に、愛した人々にこの句集を捧げる。

という挑発的な「自序」で始まり、新興俳句のいつも忠実な下僕、が示す通り、連作で主題を展開している。

小脳をひやし小さき魚を見る
水枕ガバリと寒い海がある
不眠症魚は遠い海にゐる

『旗』所収、「三章」と題されたもの。

『現代俳句・第三巻』中の西東三鬼集『空港』では、これら三句に新作「雪の夜は手を見てあかぬ長き病」を加え、「雪」と題しているが、連作の損失として「俳句を脆弱にした」「作家を作品に於いて多弁にした」との自身の指摘通り、饒舌となっている。

さて、三鬼の代表作「水枕」の句であるが、単作でなく、「三章」の連作として眺めた時、「病軽からぬことを知ると、死の影が寒々となつて迫つた。」の自句自解を待つことなく、赤黄男の場合と同じく、その飛躍の過程を明確にするのではないだろうか。つまり、三鬼が、連作の最大の効用を「一句に余る詩情を次々に一句として表はし得る連作は、確に俳句を定型として守り得た」としているように、五七五の定型「水枕」の句は、他の二句の詩情をも包含。海に近い大森の家にあつて、水枕で小脳をひやしつつ、熱と不眠症による幻覚の中で見た、魚、そして、海は、「小さき」「寒い」「遠い」の語が示す通り、死への不安の象徴であり、頭を動かす度に、水枕が音をたてるがごとく「ガバリ」と「寒々とした海となつて迫り来るのである。

長病みの足の方向海さぶさき
砲音をかぞふ氷片舌に溶き

びつことなりぬ

春ゆふべあまたのびつこ跳ねゆけり

『旗』所収、「病氣と軍艦」と題された六句中の三句。ものみな動く時節である、春のほのぼのとした夕暮れを惜しむ頃、長病みの三鬼が砲音を数えつつ見ていたのは天井、いや、足の方向の遙か先の海だったろうか。口にした氷片は熱の為に舌で溶け、奇形となつてしまった自分と同じようなびつこが、数多となつて跳ねてゆく、さぶい風景。

それは、奇形としか表現しようのない、日中戦争突入前の不安感をも暗示しているようで、赤黄男の、同じく奇形である「侏儒」の句、「秋天や われもかなしき侏儒のひとり」「木枯 木枯 ひらひらと侏儒の手」「向日葵の虚空 小びとの跳ねやまず」に通じる、単なるおかしさだけで済まされぬ、かなしき詠嘆をみる。

右の眼に大河左の眼に騎兵
手品師の指いきいきと地下の街

『旗』所収、「八章」中の二句。昭和十二年から、二年間を限度とした、俳句の短詩性を究める為の、所謂、無季俳句時代の作品であるが、実際は「哭く女窓の寒潮縞をなし」「絶壁に寒き男女の顔ならぶ」「彫大なる王氏の昼寝端午の日」なども得ている。

しかし、掲句が、それら有季俳句に劣らぬ、つまり、俳句の短詩性を究めていると言えるのは何故だろう。自句自解によれば、一句目は多摩川の土堤、二句目は日本劇場地下街で眼にしたものとあり、「俳句の短詩性を支えるものは具象性である」なる、三鬼の持論通り、そこには、「河」「騎兵」「手品師」「地下の街」という、体験的な具象物がある。

一句目、多摩川の土堤に立っていた三鬼、その右の眼には大河が流れ、左の眼には騎兵が流れてゆく。そんな、どうしようもなく流れてゆく、大きなもの、時代。二つの具象物を並べただけのような対句法が、深い暗示性をもたせせる。二句目、当時としては都会的で珍しかった「地下の街」でトランプをあやつる手品師。一句全対からは、副詞「いきいき」によってデフ

オルメされた指だけが印象に残り、妙な気味悪さが漂う。

黒蝶のめぐる銅像夕せまり

『旗』所収、「花蝶」と題された九句中の一句。自句自解によれば「時は初夏。但し蝶は居なかつた。即ちウソである。」とあり、黒蝶は嘘ということになるが、夕方が迫り、銅像をめぐった「黒」が暗示する「蝶」は、紛れも無く、赤黄男の言う、「自己の内部の現実」また、三鬼の言う、

芸術の嘘はそれが巧であれば、現実よりも現実性が多い。

(昭和10年2月号『旗艦』(自由人日記))

のである。

緑蔭に三人の老婆わらへりき

『旗』所収、「六章」中の一句。炎天下、緑の木々の茂った木陰、緑蔭は、どちらかといえば爽やかなイメージを持つが、そこを占拠した「天が定めた数」である「三人の老婆」。そして「わらひけり」ではなく、命令形「わらへ」に、完了・存続の助

動詞「り」と、経験的過去の助動詞「き」を複合させた「わらへりき」が、老醜をさらした三人の老婆の笑いを、執拗なまでに緑蔭にとどめる。

兵隊がゆくまっつ黒い汽車に乗り

『旗』所収、「黒」と題された三句中の一句。赤黄男の「憂々とゆき憂々と征くばかり」の臨場感に比較し、三鬼の第三者としての冷峻な眼差しは何故だろう。戦場に在った者と、内地で「肉体に浸透する、脳中の戦争を俳句にしよう」とした者との違いであろうか。

同じく『旗』所収の「戦争」と題された作品、

機関銃熱キ蛇腹ヲ震ハスル

機関銃眉間ニ赤キ花ガ咲ク

逆襲ノ女兵士ヲ狙ヒ撃テ

戦友ヲ葬リピストル天ニ撃ツ

絶叫する高度一万の若い戦死

所謂、「戦火相望俳句」は、机上のフィクションで終わった感があるが、「兵隊がゆく」の句や、同じく「戦争」中でも、

青き湖畔捕虜凸凹と地に眠る
黄土層天が一滴の血を垂らす
には、三鬼の「意識の凝結」が見られ、内容的深みを持つ。

だが、三鬼にとつての本当の戦争は、「脳中」で終わりはしなかった。確実に、「憂々と」、そう、昭和十五年八月三十一日、京大俳句事件で検挙され、検事との約束で、五年間の沈黙を強いられてしまうのである。

国飢えたりわれも立ち見る冬の虹

第二句集『夜の桃』所収、敗戦後、昭和二十年冬の作品。

私は、昭和十五年の夏以来自ら中絶していた俳句を、終戦と共に、再び作り初めた。新興俳句の断絶以後、私は新しい方向を発見せねばならなかった。五年間の空白の時間は新興俳句への反省の時間でもあった。しかし、それは弾圧を是認するようなものではなく、防空壕の棚に置いてあった俳句の古典と、新興俳句の精神とのつながりを発見することであった。

(一九七五年九月刊『神戸・続神戸・俳愚伝』〈再び俳句へ〉出帆社)

新興俳句との訣別ではなく、俳句の古典、つまり、戦時下、防空壕の中で読んでいた蕉門の古句と、新興俳句の精神とのつながりを発見することから再出発したという三鬼は、連作で主題を發展させることはほとんどなくなつたものの、同じ頃の赤黄男の作品、「あはれこの瓦礫の都 冬の虹」と、内容的に通い合うものを持ち、「われも」「あはれ」と、どちらもが、異邦人としての眼で、冬の虹にかかる、飢えた国、そして、瓦礫の都を眺めているのである。

寒燈の一つ一つよ国敗れ

飢えてみな親しや野分遠くより

みな大き袋を負へり雁渡る

『夜の桃』所収、何れも季語「寒燈」「野分」「雁渡る」によつて暗示される、敗戦後の風景であるが、これらより少し後の赤黄男の作品「頭蓋のくらやみ 手に 寒燈をぶらさげて」ほどの絶望感はない。

国敗れ、灯火管制から解放されたいま、一つ一つの家には、寒々とした燈がつき、みなが親しく共有している飢え、そして見

つかれば食管法違反で没収されてしまうの
に、それでも、皆、大きな袋を背負い、食
糧買い出しに農家へと赴く。そんな時、遠
くより吹いてくる秋の強風である野分と、
列になつて渡来する雁。

嘗て三鬼は『空港』自序の中で、「季語
は内容する詩を高める場合にのみ登場す
る。」と言つていたが、戦後の、この三句
を眺めただけでも、蕉門の古句とのつなが
りを発見することができないだろうか。つ
まり、

凡そ、物を作するに、本性をしるべ
し。しらざる時は、珍物新詞に魂を奪は
れて、外の事になれり。魂を奪はるる
は、その物に著する故なり。是を本意
を失ふといふ。(『去来抄』)

三鬼が「内容する詩を高める」のに、こ
こで登場させた季語は、「珍物新詞に魂を
奪はれぬ」為、そう考えていけば、内容か
らして、これら三句は「本性」を有効に
活用、且つ超克している。

中年や独語おどろく冬の坂

中年や遠くみのれる夜の桃

『夜の桃』所収。五年間の沈黙を強い
られた三鬼。しかし、『俳愚伝』によれば、
戦争中に一度だけ出席した句会で「雄鶏や
落葉の下に何もなき」「中年や焚火育つる
顔しかめ」の二句を得ており、戦後は中年
の感情を基盤としようと考えていた。

その中年感情を象徴する「冬の坂」と
「夜の桃」という季語。それは独語に驚く
ことの老いの意識、つまり、冬の坂へ突入
しようとしている自分自身であり、また、
遠くに実れる何か、即ち、夜の桃を思つて
いる自分自身でもある。その頃ちようと赤
黄男も「たくましい壮年の歌」である『蛇
の笛』に「青梅を噛み 中年よ なにつぶ
やく」「紅薔薇や きちがひならぬ わが
独語」を残している。

穀象の群を天より見るごとく

まくなぎの阿鼻叫喚をふりかぶる

『夜の桃』所収。連作の効果の一つとし
て三鬼が「作家の観察を深くした」と言っ
ているように、季語でもある「穀象」「ま
くなぎ」を洞察することで得た、連作中の
各一句。

自句自解によれば、「穀象の志向するも
のは暗黒」「生命を持つものの大叫喚が聞
こえないのは人間の耳が不完全だからだ」
とあるが、人間そのものでもある、穀象の
群が目ざす暗黒、また、まくなぎの阿鼻叫
喚を、天より見、ふりかぶつたのは、神、
いや、「酷烈なる精神」で、「万象に立ち向
つた」俳人・三鬼の感覚なのである。赤黄
男も同じように「叫喚は 黒焦げの木のた
つかぎり」と、黒焦げの木、しかし、生命
を持つものと捉えた。「叫喚」を聞いてい
る。

枯蓮のうごく時きてみなうごく
『夜の桃』所収。「一句のために、一時間
も池の端に立って凝視することで、戦前の
作風を全く転換させる機縁になった」とい
うこの作品は、単なる自然描写ではなく、
まさに、芭蕉の言う、

「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習
へ」と師の詞のありしも、私意をはなれ
よといふ事なり。(中略)

習へといふは、物に入りて、その微の
顯れて情感するや、句と成る所なり。

〔赤雙紙〕

「私意をはなれよ」つまり「枯蓮」の「微」に触発された「情」こそが詩的眞実であり、静止している枯蓮に動く風が来た時、皆、一斉に動き始めるのを感じたのである。戦後という混乱期にあつても、動き出さねば、だが、それは池の中に枯れたまま、無数に突っ立っている枯蓮の姿であり、無残だ。

三鬼自身は、この「枯蓮」の句によって、戦後の作風が一変したと言っているが、戦前の「水枕ガバリと寒い海がある」「右の眼に大河左の眼に騎兵」などにも、物と我との一元化を見る。

広島や卵食ふ時口ひらく

『三鬼百句』所収。「有名なる街」と題された九句中の一句。『続神戸』によれば、乗換の為に立ち寄った広島の間暗の中で、不意にツルリとむけたゆで卵から、「白熱一閃、ズルリとむけた人間の皮膚」を連想しているが、それも三鬼の感覚。「卵一つポケットの手にクリスマス」「卵割りし確かな一事秋の朝」と、思い入れのある卵を

食う時、必要なだけの口を開く。それは原爆が投下された「有名なる街」にあつて、生きていくことの証しでもある。

逃げて軍鶏に西日がべたべたと

『夜の桃』所収。三鬼はいつたい何から逃げようとしていたのだろうか。もちろん此処で逃げているのは、闘鶏で負けた軍鶏であるが、逃げてでも逃げてでも執拗にべたべたと張りつく西日は、まるで三鬼に押された烙印みたい、女性と金銭面では困った人であり続けたようだ。

百舌に顔切られて今日が始まるか

『夜の桃』・第三句集『今日』所収。この句が発表された昭和二十三年には、秋元不死男・平畑静塔らと、山口誓子を擁した『天狼』を創刊。その編集にあたる一方で、『激浪』創刊・指導、『雷光』に指導者として招聘、と、心急ぎ、百舌に顔切られるがごとき今日の始まりであつたが、いつも独りである百舌ほどの潔さはなく、次第に誓子へと傾斜していく。

涙出づ眼鏡のまま死にしかと

『今日』所収。「悼石橋辰之助」という前書が附されている。素朴な表現により、三鬼の深い悲しみを感じるが、「右の眼に大河左の眼に騎兵」「広島や卵食ふ時口ひらく」などに見られる象徴性はない。無季作家として出発した三鬼であつたが、

無季俳句は、無季俳句のための無季俳句ではない。人間の声を発するための道程に過ぎない。そして人間の声はいつでも超季的である。

（昭和25年2月号『雷光』〈超季への無季〉）

という、含みのある言葉で、次第に有季で、「人間の声を発する」ようになるのである。

照る沖へ馬にまたがり枯野進む

『今日』所収。馬にまたがって行く方向にある「照る沖」は何を象徴するのだろうか。誓子との道行き、いや、鬼才とも言われた、三鬼自身にさえわからぬ何か。しかし、いま、確実に進んでいるのは枯野の中、本当に照る沖へと行き着くのだろう

か。

頭悪き日やげんげ田に牛暴れ

『今日』所収。この句を作った昭和二十四年には、『天狼』の編集を誓子と交替している。頭悪きと感じ、何ものかに対し、暴れた牛、いや、三鬼、そんな日は、田一面に美しく咲き誇っている、紫雲英さえもが腹立たしいのだ。

石の上に踊るかまきり風もなし

『今日』所収。赤黄男は「石の上に秋の鬼あて火を焚けり」と、「石の上」に自分の分身として「秋の鬼」を登場させているが、三鬼はよく描いたという「かまきり」によって俗説を暗示している。変化の風が吹くこともなく、何かに食われてしまいかもしれぬのに、「石の上で踊る」しか方法のない、ちよつぴりおかしくて、哀しい「かまきり」。

それは、誓子の呪縛下で「一句に余る詩情」を連作で表わすことも、また、「内容する詩を高める場合にのみ登場」させていた季語を、愈々捨てることも叶わなくなつてしまった三鬼そのものようでもあり、

あくまでも痛ましく、「秋の鬼」となつて「石の上で火を焚く」つまり、戦前、戦中、戦後と、態度を変えることのなかった赤黄男の持続をどんな思いで眺めていただろう。

「照る沖へ」——「俳句の古典と、新興俳句精神とのつながり」を発見すべく、『What is life?』と自問自答しつつ、三鬼は、最後の句集『変身』へと進むのである。

三、俳諧の誠

『蛇の笛』で、抽象的なものと具体的なものの組み合わせである、「象徴」の「空白」が大きいほど強烈な暗示力を持つことを認識しつつも、自らの空白性を払拭できず「空白は 空白のまま」と言わざるを得なかった赤黄男が「裸足のまま」出発して辿り着いたのは、何処だったろう。

無名の空間 跳び上る 白い棒

草二本だけ生えてゐる 時間

『黙示』所収。名づけるものさえも無い、ただの空間、それは、赤黄男が覗き込

んだ空白かもしれない。嘗て、「象徴の径」を発見する為に、「真実のまへ」で「素つ裸で跳躍」しようとしたが、そこには、白い棒が跳び上り、草が二本だけ生えているような時間があるのみだった。それは、山本健吉の言う「超現実主義的前衛詩の世界」だろうか。

僕は、現実を一度ばらばらに壊して、新たな、僕の現実を創らうとする。即ち僕の宇宙の創造への希求である。

(雄鶏日記)

「僕の宇宙」、それは、赤黄男の「自己の内部の現実」であり、三鬼の「芸術の嘘はそれが巧であれば、現実よりも現実性が多い。」即ち、「超現実も現実以外のものではない。」のである。

枯木ノ葬列 イツマデモ 立ツテ
オレ

『黙示』所収。『魚の骨』では、「歩くべき」とされてきた「枯木」も、ここでは「葬列」とみなされている。それも、不動の姿勢で、「イツマデモ 立ツテオレ」

と。埋葬地まで進むこともできず、生ける屍のごとく、立っているしかない枯木、それは赤黄男自身のようにでもあり、カタカナ混じりの命令語が、機械的、侮辱的に響いてくる。

風の 写実の 皮を剥がれた牛の胴
倒錯や 象徴の 杭たち並び

『黙示』所収。いま、風の中に、「写実」としてあるのは、皮を剥がれた牛の胴。そして、

「寓意」は常識的であり、「象徴」は非常識である。

俳句の「滑稽」は往々「寓意」の常識性の場を指してゐる。が「象徴」はむしろ、「痛苦」であり、間隙を辞さぬ烈しい応射である。

「寓意」は妥協的であり「象徴」は、むしろ拒否的でさへある。

象徴は（間接的）なものではなく、より厳しく（直接的）なものである。（ク
ロノスの舌）

草田男俳句にしばしば登場する寓意性に

対し、非常識、痛苦、拒否的ではない、しかし、直接的であるからこそ、間隙を辞さぬ烈しい応射がある「象徴」。

新興俳句の「いつも忠実な下僕」だった三鬼も「俳句は叙情詩であり、象徴は俳句の表現上、最高の様式である。」と言っていたが、今や、赤黄男の前には、それが倒錯の杭となって、立ち並んでいるだけなのである。

ガラスのコップ 沙漠をよぎる影

ガラスのコップ——戦艦が突えてゐる
『黙示』所収。神からの「黙示」である、赤黄男の「ガラスのコップ」。しかし、それには、或は、自分自身の姿だったかもしれない、沙漠をよぎる影と、炎えていく戦艦が見えるだけだったのである。

ここに至つて連作は姿を消し、季は完全に捨てられぬまま、抽象化への傾斜を強めていった赤黄男は、「詩人とは、つひに永遠に実験するものでしかないのか」という言葉を残し、昭和三十二年十二月『薔薇』終刊と共に沈黙。肺癌で亡くなる昭和三十七年三月七日の約五ヵ月前に刊行された『黙示』は、俳句の「純粹孤独」を標榜す

る赤黄男にふさわしく、

零の中 爪立ちをして哭いてゐる
で終わっている。

一方、「照る沖」を目ざした三鬼は、最後の句集『変身』で何を得たのだろう。

つらら太りほういほういと泣き男

『変身』所収。三鬼俳句の短詩性を支える具象物である「つらら太り」は何を暗示しているのだろうか。掲句の前に「老兄を見舞う 五句」があることから、父親がわりでもあった、死の近い長兄への思いであろうか。「ほういほうい」が掛け声のように、ちよっぴりおかしく、やがて「泣き男」を悲しみの淵へと追いやる。

白息黒息骸の彼へひた急ぐ

髪黒々と若者の死の仮面

死にたれば一段高し蠟涙ツツ

弟子葬り帰りし生身塩に打たる

『変身』所収。「中村丘の死 九句」中の四句。三鬼の小説「八百匁」にも出てくる、三十歳を過ぎた女性と、二十一歳の中

村丘、五十六歳の三鬼との葛藤。同じく岡山県津山市出身で、可愛がっていた弟子であっただけに、死でもって報いた行動は相当な衝撃で、「白息黒息」「生身塩に打たる」に、その心境がよく出ている。白髪まじりの自分に対し、髪黒々と明るい未来があったにもかかわらず、真意を明かすことなく、仮面をかぶったまま死へと急ぎ、いまは一段高く祀られている中村丘。そして、残されたものといえば、罪の意識にさいなまれ、蠟涙をツツと流すほかないのである。

連作、しかも無季で、主題を明確に表わし得ているのは、新興俳句を出発とする三鬼の面目躍如といったところか。

冬に生ればつた遅すぎる早すぎる

『変身』所収。時期を誤り、冬に生れてしまったばばった。「遅すぎる早すぎる」の対句が、間違えさえしなければ別の道があったかもしれないのに、己が人生を振り返っての感慨を深いものとさせるが、現実から逃避したかった三鬼は、中村丘自殺後に書いた小説「八百匄」をハッピーエンドにしている。

秋の暮大魚の骨を海が引く

『変身』所収。「大魚から古代の爬虫類のようなものを想像した」という誓子評に対し、高柳重信は「三鬼を葉山に訪ね、彼と共に初夏の海岸を散歩したことがあったが、その砂浜で、いくつかの、いわゆる大魚の骨を見た」と書き残しているから、これは実景だろう。

秋の暮に葉山周辺の海を歩いていた三鬼。この句の短詩性を支えている、体験的な具象物である、「大魚の骨」は、或は、普通の「魚の」であったかもしれない。しかし、それを敢て「大魚の」また「海が引く」とした為、まるで誓子の呪縛から逃れ得たかのようなスケールの大ききさでもって、大自然の営みそのものが我々に迫り来るのである。

海に足浸る三日月に首吊らば

『変身』以後。「俳句定型の制約である五七五リズムから俳人を解放すれば、俳句の最大の効用である大衆性を損することになら」と言っていた三鬼であるが、破調で、しかも抽象性の強いものに仕上がっている。

この句の前に「父と兄藉もて呼ぶか彼岸花」「虫の音に体漂えり死の病」があることから、死期の近いことを悟っているのであろう三鬼は、嘗て赤黄男が交感した『三日月』に「首吊らば」と提示してみる。こうして死を待つのではなく、三日月に首を吊りさえすれば、足は海に浸る、そう、「大魚の骨」のように、海が引いてゆくのに……。

倒置法によって獲得した「行きて帰る心」が、三日月に照らし出された、具象物とは思われぬ「足」と「首」の印象を明瞭にし、超現実へと誘う。

人遠く春三日月と死が近し

『変身』以後。根っここのついたかたまり、切株となつてしまった赤黄男に人語が遠くなったように、三鬼にも人は遠のき、春になつても病は癒えることなく、「首吊らば」と思っていた三日月と死が近づく。

春を病み松の根つ子も見あきたり

『変身』以後。昭和三十七年三月七日作、絶句。三月より起き上がれず、危篤の状態のなかで、三鬼は、前年辿った「奥の

細道」、そして、芭蕉の句「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」を思っていたかも知れない。

「防空壕の棚に置いてあった俳句の古典と、新興俳句の精神とのつながり」を。だが、父や兄同様、胃癌に克つことはできず、「松の根つ子も見あきたり」と、「変身」の途中、四月一日に没してしまうのである。

青高原わが変身の裸馬逃げよ

もう、何からも逃げる必要のなくなった裸馬は、青高原を気持ちよく走っているだろうか。

ところで、新興俳句運動の作家たちを、「脱俳諧」「入俳諧」で画した山本健吉であったが、その「俳諧」は何を意味するのだろうか。

「発句」を完結した近代詩として独立させる為に、「俳句」なる名称を用いた経緯からすれば、それ以前の作品、つまり、連続した形態を基調としていた「俳諧」は、次に呼応する句の存在を当然意識する。そう考えると、「連作」で主題を展開した新

興俳句の方が、より「俳諧」に近いことになり、また、脇、第三、平句と続くその構成は、多くの無季句を生んでいることからして、戦前戦後と一貫していた赤黄男こそが、「入俳諧」を意図した「唯一の男」ということになってしまう。

さらに山本健吉は、赤黄男を「超現実主義的前衛詩の世界を俳句の上で実現しようとした」とし、三鬼を「俳意の確かさにおいて、往年の新興俳人中随一である」とする。そして、三鬼はといえば、

俳句は感覚の表明されたものだ。古人の所謂「さび」「しをり」「細み」「軽み」みな感覚ではないか。古来万人が試みたこれらの言葉の解釈が、結局判つた様な判らぬ様な気がするのは、感覚と云ふものを説明しやうとしたからだ。感覚は説明しても判るものではない。(昭和22年1月号『俳句研究』へ誓子氏の三つの作品について)

と、我々を「俳諧の誠」へと導いてくれるのである。

見るにあり、聞くにあり、作者感するや句となる所は、即ち俳諧の誠なり。(白雙紙)

師の風雅に、万代不易あり、一時の變化あり。この二つに究り、その本一つなり。その一つといふは風雅の誠なり。(中略)

また、千変万化する物は自然の理なり。変化にうつらざれば風あらたまらず。(中略) 責むる者は、その地に足をすゑがたく、一步自然に進む理なり。

行末幾千変万化するとも、誠の變化はみな師の俳諧なり。(赤雙紙)

昭和十年創刊の『旗艦』、また、昭和十五年刊の『現代俳句・第三卷』で、共に新興俳人としてのスタートを切った赤黄男と三鬼であったが、戦後はどちらかといえば反撥しあうことの方が多く、一方は、「連作」と一字空白表記による「切れ」で空白の激しさを覗き込んだが故に、自らも空白に侵食され、「零」の中、爪立ちをして哭いてゐる」を最後に沈黙、そして、もう一方は、連作の効用や、俳句の短詩性を支える

ものは季でなく具象物、また、芸術の嘘は巧みであればあるほど現実性が強いことを認識しつつも、誓子に傾斜、しかし、戦中の強いられた時代以外は沈黙することなく、最後まで、「俳句の古典と、新興俳句の精神とのつながりを発見すること」に努めたのである。

昭和の同時代を、「その地に足をすゑがたく、」それぞれの方法で、「責むる者」として、「俳諧の誠」即ち、詩的真實性を求め、駆け抜けていった富澤赤黄男と西東三鬼——「現代俳句」は、これから、どのような「誠の変化」をみせるだろう。

(参考文献)

『富澤赤黄男全句集』 沖積舎

『蝸牛俳句文庫』⑩ 『富澤赤黄男』 四ツ谷龍

編著 蝸牛舎

教育委員会文庫⑤ 『郷土の俳人富澤赤黄

男』 保内町教育委員会

『西東三鬼全句集』 平畑静塔・三谷昭監修

ニトリア書房

俳句シリーズ人と作品13 『西東三鬼』

沢木欣一・鈴木六林男著 桜楓社

『西東三鬼読本』 角川書店

『神戸・続神戸・俳愚伝』 西東三鬼著

出帆社

『西東三鬼』 図録 津山市教育委員会

『高柳重信全集』 第二卷 立風書房

『天才のボエジ』 夏石番矢著 邑書林

『現代俳句の台座』 神田秀夫著 明治書院

『現代の俳人たち』 山本健吉著 角川書店

『連歌論集・能楽論集・俳論集』 伊地知鐵

男・表章・栗山理一校注 小学館

『芭蕉文集』 富山奏校注 新潮社

(使用文字は応募論文のままとしました)